

『時のかけ「橋」』

042 サレジオ学院高等学校 鉄道・模型部

1936年某日、ある男が万世橋の職場に行くために電車に乗っていた。

男は座席で居眠りをした。

「ここは何処だろうか」

彼はようやく目を覚ました。線形からすれば職場あたりであろうか。

「ここは万世橋駅あたりか。」

隣の人に話しかけた。「誰だお前。」

やけにぶっきらぼうな態度を取られた。

「あと何いってんだ。万世橋は80年以上前に廃止されたぞ。」

「次の駅はどこだ」

「神田だ」

「今は何年ですか」

「2026年」

男は高いビル群に囲まれ、近未来的な感覚を覚えた。

「これが東京なのか…」

男は大衆の中ではやけにフォーマルで、悪く言えば浮いていた。

誰かが彼の方を叩いた。同僚であった。「おい、起きろ、行くぞ」

景色は見慣れた景色に戻っていた。彼はあの未来都市が夢であったと気づいたが、それが将来の東京の姿になることには気づかなかった。

彼は眠い目をこすりながら出勤する。

彼が夢で見た景色こそ、まさに今の万世橋の姿であった。



旅する
江戸川乱歩賞
2026 出展作品